

# もう一つのキオツジャ戦争（1378-1381）

——パドヴァ領主フランチェスコ一世とヴェネツィア——

面 地 敦\*

はじめに一陸上からのヴェネツィアに対する脅威

中世イタリアにおいて、4つの著名な海上貿易都市があった。アマルフィ、ピサ、ジェノヴァ、ヴェネツィアがそれである。海上貿易によって栄えたこれらの都市は、海上からばかりでなく、陸上からの脅威にもしばしばさらされた。アマルフィはノルマン王朝の支配下に入ることによって、その活力を失った（1071年）。ピサの場合、敵はイスラム教徒の海賊やジェノヴァだけではなく、ピサの衰えのきっかけが1283年のメロリア海戦での敗北であったことを考えると、ジェノヴァが最大の敵であったことは確かだが、ルッカやフィレンツェといった内陸都市も、警戒すべき脅威であった。現に、時代は下るが、15世紀はじめにピサはフィレンツェによって占領されてしまうのである。ジェノヴァの場合、その最大のライバルはヴェネツィアだったとされているが、同時にミラノの動向も常に油断ならなかった。ジェノヴァの場合、ヴェネツィアを追い詰めつつあった第4次ヴェネツィア対ジェノヴァ戦争（1378-1381年）<sup>1)</sup>の真最中に、背後からミラノの攻撃を受ける有様であった<sup>2)</sup>。

---

\* 本学大学院文学研究科博士後期課程

キーワード：ヴェネツィア、パドヴァ、フランチェスコ一世、キナッツォ、キオツジャ戦争

一方、ヴェネツィアの場合はどうだっただろうか。古くは810年にフランク国王シャルルマーニュはその息子ピピンを派遣してヴェネツィアを攻撃させたと伝えられている<sup>3)</sup>。また、1509年に始まるカンブレー同盟戦争において、その年の5月にヴェネツィア軍は、アニャデッロの戦いでフランス・ミラノ連合軍に敗れた直後、100年間かけて作り上げたテッラフェルマ（海上都市ヴェネツィアに対して、イタリア本土側をテッラフェルマと呼ぶ）の領土を短期間でほとんど失った。この時、ヴェネツィア本土そのものが直接攻撃されることはなかったものの、陸上からのルートが一時的ながら完全に塞がれてしまった。これも陸上からの重大な脅威だったと言えよう。

本稿では、1380年前後のヴェネツィア共和国に生じた「陸からの脅威」を取り上げる。それは上に記した第4次ヴェネツィア対ジェノヴァ戦争とそれに続く時代のことである。この戦争は別名キオッジャ戦争とも呼ばれるが、それは、この戦争で最も有名な戦闘が、ヴェネツィアの近くの小都市キオッジャをめぐるヴェネツィアとジェノヴァの争いであったからである。ヴェネツィア史において、この戦争は大変有名である。なぜなら、この戦争が地中海貿易の主役たるこの2都市の最後の大勝負となったからである。しかしその一方で必ずしも従来大きく取り上げられていないのが、同時に行われていたテッラフェルマでの戦闘である。この戦争でジェノヴァは独力でヴェネツィアと戦っていたのではなく、パドヴァ、ハンガリー、アクイレイア総大司教<sup>4)</sup>と同盟を結んでヴェネツィアに対抗していたのである。これらの3つの勢力は、あるときはジェノヴァと協力しながら、またあるときはジェノヴァ軍とは別個にヴェネツィアと戦った。戦場はキオッジャだけではなく、イタリア本土やアドリア海などにおいても戦いが行われていた。そしてテッラフェルマからヴェネツィアを最も脅かし続けていたのは、パドヴァ領主のフランチェスコ・イル・ヴェッキオ・ダ・カッ

## もう一つのキオツジャ戦争（1378-1381）

ラーラ（フランチェスコ一世，以下，このように記す）だった。

従来，この陸上での戦いは，キオツジャの戦いほどには注目を引いていない。ヴェネツィアのカレー艦隊の老司令官ヴェットル・ピザーニ，高齢をおして自らキオツジャ奪回作戦に出陣したヴェネツィアの元首（ドージェ）アンドレア・コンタリーニ，キオツジャ戦争最高の英雄であるカルロ・ゼノのような登場人物は，これから記す陸上戦闘には出てこない。しかし，この戦争がパドヴァ・ヴェネツィア双方にとって重要であり，後代のヴェネツィアのテラフェルマ政策に影響を及ぼしたことは，キオツジャ戦争後の進展を見ても明らかである。この時期の軍事行動を記している一次資料として，同時代人ダニエレ・キナッツォが記した“Cronica de la guerra da Viniciani a Zenovesi”（ヴェネツィア人とジェノヴァ人の戦争の年代記）を使用する。彼の年代記は，全ての事実をカバーしているわけではなく，（例えば，外交交渉の条件に関しては必ずしも詳しくない）また，彼が必ずしも公平な視点で書いているわけでもないが，間違いなくこの時期の重要な一次資料の一つである。この資料を使うことで，陸地における「もう一つのキオツジャ戦争」及びその後の軍事行動の一端を示すことが出来ると考える。

本論は，主にキナッツォの年代記に依拠して1380年前後のパドヴァ領主フランチェスコ一世の行動をたどりながら，それまで必ずしも大きく取り上げられなかった陸上戦闘を記すことにより，「陸上からの脅威」がヴェネツィアにとって大きかったことを示そうという試みである。

### 第1章 キオツジャ戦争以前のヴェネツィアとパドヴァ

パドヴァはヴェネツィアから40キロほど西に位置する都市であり，イタリア北東部の陸上交通の分岐点であった。ここから東にはヴェネツィアやフリウーリ地方（スロヴェニアやオーストリアと国境を接する地域）へと

つながり、南はボローニャ、フィレンツェ、さらにはローマへと道は続き、西へはヴェローナそしてミラノへと通じている。ヴェネツィア人がミラノやフィレンツェに行くときはパドヴァを通らなければならないので、この都市はヴェネツィアがイタリア本土およびアルプス以北で商業活動を営むにあたって極めて重要な場所であった。しかも、この地方の主要河川のひとつであるブレンタ川はパドヴァとキオッジャ近辺を経由してアドリア海に流れている。このように、パドヴァはヴェネツィアの河川交通にとっても重要な場所であった。

ここでまず、本論に入る前に、13世紀及びそれ以前のヴェネツィア人とパドヴァ地方との関係、特にその進出について簡単に記しておく。マルコ・ポツツァによれば、すでに10世紀末にパドヴァ市内のサンタ・ジュステイーナ修道院がヴェネツィアの宗教勢力による土地所有の進展をとめようとした、という記録が残っている<sup>5)</sup>。しかし、実際にヴェネツィア人の土地所有がパドヴァにとって見過ごせないものになったのは12世紀に入ってからであった<sup>6)</sup>。これらの争いの原因としては、土地や川に関する権利のほか未確定な国境や、農産物の輸出入の自由をめぐる争いなどがあった。1225年の抗争の時、ヴェネツィアのドージェであるピエトロ・ヅィアーニはヴェネツィア市民に対し、パドヴァ人の報復を避けるためにパドヴァ領内に行って商業をすることを禁じたという事実から、このときの両者の関係がかなり険悪であったことが推察されうる。また、1234年の争いにおいては、パドヴァ側が、パドヴァ地域内のヴェネツィア人の土地や生産物収益を没収し始めるという事態が生じている。この争いは、キオッジャ地方での国境未確定地域をめぐる争いであった。この争いで、ヴェネツィアは、この地域の川の支配権を強固にしようとする目論み、パドヴァはキオッジャの塩を独占するヴェネツィアから、その独占を免れようとしていた。ともあれ、ヴェネツィア市民は、あるときは購入によって、またあるときは婚姻

## もう一つのキオッジャ戦争（1378-1381）

による権利取得を通じて、市民個人によるテッラフェルマの土地所有を増大させていった。こうした市民の動向には、ヴェネツィアにとっても注意すべき点があった。イタリア本土に土地を所有するヴェネツィア市民が増えると、ヴェネツィアの対本土政策が公正に行われなくなる恐れが生じるからであった。そこで、13世紀後半からヴェネツィアでは、市民によるテッラフェルマの土地所有に関する法律がたびたび提出・可決された<sup>7)</sup>。

以上のようにヴェネツィア市民の私的な土地所有が進行したのであるが、時には軍事的行動を伴う場合もあった。たとえば1240年のフェッラーラ出兵や1256年のパドヴァ出兵である。前者によって、ヴェネツィアはフェッラーラと有利な形で通商条約を結ぶことが出来、後者によって、ヴェネツィアはパドヴァ及びその周辺にヴェネツィアを脅かすような強大な勢力が出来るのを阻止したのであった。このように、13世紀まで、ヴェネツィアにとってパドヴァは大きな脅威でなかった。13世紀後半にパドヴァ領主となったダ・ロマーノ一族が大勢力になる危険があったが、この脅威は短期間で終わった。むしろ、パドヴァ側にとって、ヴェネツィア人の土地所有の進展は厄介な問題であった。

14世紀初頭におけるヴェネツィアとパドヴァの間の争いを見ると、1304年の「塩紛争」があげられる。これはヴェネツィアの塩の独占を嫌ったパドヴァが自分たちもキオッジャの近くに塩田を作ろうと目論んだことから起こったものであった。翌年ヴェネツィアに有利な形で和解している<sup>8)</sup>。さらに1308年フェッラーラ戦争<sup>9)</sup>において、パドヴァは反ヴェネツィア勢力につき、パドヴァ領内におけるヴェネツィア人の土地経営に妨害工作を行ったり、通商を邪魔したりした。1336年、ヴェローナ当主マステイーノ・デッラ・スカーラとヴェネツィア、フィレンツェ<sup>10)</sup>、ミラノ同盟軍との間で戦争が起り、1339年まで続いた。この戦争を大きく左右したのはパドヴァの動向であった。この時点で、パドヴァを支配していたカッラーラ

家はヴェローナ側の勢力であった。そこで、反ヴェローナ同盟はパドヴァと交渉し、パドヴァ、モンセーリチェ、ヴィチェンツァなどの都市の領有権をカッラーラ家に認めることと引き換えに、スカーラ家の支配から離脱するように仕向けた<sup>11)</sup>。この戦争は、パドヴァのスカーラ家からの独立とパドヴァとヴェネツィアとの友好関係の成立などをもたらしたことで重要である。この後十数年間は、ヴェネツィアとパドヴァは友好関係にあった<sup>12)</sup>。

そうした状況が14世紀後半に入ると全く変わる。その原因の一つとして、フランチェスコ一世がパドヴァの新領主になったことにより、パドヴァがヴェネツィアから距離を取り始めたことがあげられる。1355年にパドヴァの領主となったフランチェスコ一世は、ハンガリー王ラヨシ一世（イタリア読みではルドヴィーコ一世。以後ラヨシ一世で統一）と同盟を結んだ。フランチェスコ一世とラヨシ一世の関係がいつから友好的になったのかはわからない。しかし、1356年から1358年にかけてヴェネツィアとハンガリーの戦争が起こった時、パドヴァ領主フランチェスコ一世がヴェネツィアの味方をせず中立を守ったという事実から、この戦争後に同盟が結ばれたのではないかと考える。この同盟により、パドヴァは大きな後ろ盾を得ることになった。フランチェスコ一世がハンガリー王との同盟をいかに大きく見ていたかは、後のキオツジャ戦争開始時に

私はハンガリー王の意思に従わなければならない、なぜならば自分は彼の召使であるから<sup>13)</sup>。

と言っていることから察することが出来る。

そして1372年にフランチェスコ一世とヴェネツィアとの間で国境紛争が起こった。後年フランチェスコ一世がキオツジャ戦争に積極的に参戦した

## もう一つのキオッジャ戦争（1378-1381）

動機の一つが明らかにこの紛争の結果のためだと見なさざるを得ないので、ここでこの紛争について触れておく。もともとこの紛争の発端は、ヴィッラノーヴァという小区域の領有権を巡るものであった。しかしパドヴァにとって折悪しく、頼みとするハンガリー王はパドヴァに十分な援助を送ることが出来なかった。戦争は1年後に終わったが、以下の通り、和平の条件はパドヴァにとって厳しいものであった。まず、パドヴァ領主フランチェスコ一世と二世は自らヴェネツィアに出向き、ドージェの前で許しを請わなければならなかった。そして国境の線引きに関しては、ヴェネツィア貴族のみからなる委員会が決めることになり、さらにパドヴァは国境付近の多くの塔や砦を壊さなければならなかった。パドヴァは25万ドゥカート<sup>14)</sup>の賠償金を払わなければならなかった。

以上から、パドヴァとヴェネツィアの国境付近で塔や砦に関する問題点があったこと、塩の供給問題がヴェネツィアの外交的武器であったこと、和平がヴェネツィアにとって一方的に有利な形で結ばれていたことが明らかである。したがって、それから数年後にジェノヴァが反ヴェネツィア同盟を呼びかけると、前の国境紛争の結果に不満であったフランチェスコ一世がすぐに応じたわけが理解出来るであろう。

さらに付け加えると、1372年12月の交渉においては、ヴェネツィアは、パドヴァが弱い立場なのを見越してパドヴァが受け入れがたいような条件を提出して、戦争の続行を半ば強要した形になった。両者の間では、フランチェスコ一世の方が和平を切望していた。交渉前、彼は、戦費をヴェネツィアに払いたくなかったが、国境線を程良い条件で引くことが出来れば、フェルトレとチヴィダレー（共にパドヴァの北方に位置する小都市。オーストリア方面への交通の要所）をヴェネツィアに譲る用意は出来ていた。しかしヴェネツィアはフランチェスコ一世に対し、とても飲めないような条件を課してきたので、交渉は決裂してしまった<sup>15)</sup>。戦況が決定的に有利

というわけではないというのにヴェネツィアが高圧的な態度をとってきたところに、その時期のヴェネツィアとパドヴァとの間の力関係が見て取れるであろう。言うまでもなく、キオッジャ戦争が起こるまでは、経済的にも軍事的にもヴェネツィアの方がパドヴァよりも優勢であった。

## 第2章 キオッジャ戦争（1378-81年）におけるフランчесコー世

すでに述べたとおり、ヴェネツィアに対して怨恨を抱いていたフランчесコー世は、ジェノヴァが提案した反ヴェネツィア同盟に参加した。パドヴァのこの戦争における活動は大きく分けて、キオッジャ方面とトレヴィーゾ方面の2つである。前者において、パドヴァはジェノヴァの共同軍そして後方支援軍であったが、後者においては、パドヴァはヴェネツィアを陸上から脅かす主力部隊として働いていた。

さて、本論の「キオッジャの戦い」に関する叙述では、同時代人ダニエレ・キナッツォの年代記を主な資料として用いるが、彼について簡単に述べる。彼の祖父はグリエルミーノといって、フリウーリ地方のモッタという小都市で公証人をしていた。また、父のピアキーノは兵士としてヴェネツィアのために働き、1346年にはマリノ・ファリエールに仕えてフレゴーナの城主になっている。しかし、1351年、謀反を疑われて罰せられ、財産は没収され、その後1363年6月、ミラノ公ベルナボ・ヴィスコンティの支配下にあったクレモーナに行つてそこで働き、数年後に死去した。父の相続人になったダニエレは1369年、トレヴィーゾに赴き、そこに残っていた父の財産の相続をめぐる訴訟を起こしている。その時にヴェネツィアの元老院が彼を好意的に扱い、便宜を図った。それから数年もたたないうちに、彼はトレヴィーゾの中心であるエルベ広場の薬屋の店主となる<sup>16)</sup>。なお薬屋はしばしば文房具屋を兼ねていて、紙や筆記道具、書籍なども扱い、ルッカのセルカンピのように、自らも文筆活動を行うことがあった<sup>17)</sup>。恐



### もう一つのキオッジャ戦争（1378-1381）

らくキナッツォもそうした例の1つだったと考えられる。今でもキナッツォのこの年代記は、キオッジャの戦いに関する貴重な資料の1つと見なされている。ともあれ、ダニエレ・キナッツォは、ヴェネツィア市民ではなかったとはいえ、ヴェネツィア貴族の便宜を受けてトレヴィーゾの薬屋の店主におさまり、1383年2月以前にはすでにトレヴィーゾの市民権を得ていた人物である。故に、パドヴァ領主フランチェスコ一世に気を使った表現をしてはいるが<sup>18)</sup>、基本的にはヴェネツィアに好意的であり、それをうかがわせる文章も時折見られる。

先述したとおり、キオッジャ戦争はヴェネツィアとジェノヴァとの戦争だと見られがちであるが、フランチェスコ一世が率いるパドヴァ軍もキオッジャ攻略及び兵站、そしてトレヴィーゾ方面の戦闘で大いに働いた。

この戦争の主戦場になったキオッジャは、ヴェネツィアから南約30キロに位置する港町であるが、そればかりでなくキオッジャはこの地域きつての塩田として極めて重要な場所であった。いつからヴェネツィアの塩田であったのかは特定出来ないが、1179年11月付けでこれに関する記録が残されているので<sup>19)</sup>、12世紀後半にはすでにそのように機能していたと考えられる。塩は単なる生産物ではなかった。貴重な輸出品として、外貨獲得の手段でもあり、輸入品に対する支払いの手段でもあり、また禁輸をちらつかせて相手を脅迫するための強力な外交手段でもあった。ヴェネツィア共和国はキオッジャを抑え、この地域一帯の塩の生産・流通を独占することによって、経済的・外交的に大きな成果を挙げていた。このことは先述した1372-73年の国境紛争にもあてはまる。もっとも、キオッジャ戦争時に同盟軍がキオッジャ攻略に乗り出したのは、恐らく塩田の存在以上に、この地がヴェネツィア船団のアドリア海の出入りにとって極めて重要な位置にあったからだろう。

この有名な戦争の経過は、従来の視点に基づいて簡単にたどれば以下の

ようなものであった。

- ① 1378年、黒海の小競り合いにより戦争が始まる。そしてジェノヴァの誘いをきっかけに反ヴェネツィア同盟（ジェノヴァ、ハンガリー<sup>20</sup>、パドヴァ、アクイレイア総大司教）が成立する。
- ② 1379年初め、ヴェットール・ピザーニ率いるヴェネツィア艦隊がイストリア沖合いでジェノヴァ艦隊に敗れる。
- ③ 1379年8月、ジェノヴァ、ハンガリー、パドヴァ連合軍がキオッジャを攻略し、陸上海上の両方からヴェネツィアを封鎖するに至る。
- ④ 1379年秋、キオッジャ奪回のため、ヴェネツィアが艦隊を編成し、キオッジャに押し寄せ、キオッジャにこもるジェノヴァ軍を逆に封鎖する。
- ⑤ 1380年6月、ジェノヴァ軍は封鎖を破ることが出来ず、ヴェネツィアに降伏する。
- ⑥ 1381年8月、トリノーの和約がなり、ヴェネツィアと同盟の戦争が終わる。

以上の要約はあくまでこの戦争を専ら対ジェノヴァ戦争と見なす従来の記述に基づくものであって、キナッツォの記録を通してこの戦争を眺めると、後に見るとおりかなり大きな欠落が見られることは否定出来ない。また③のように一応パドヴァに触れている場合でも、フランチェスコ一世が演じた役割を単に同盟の一員として示しただけでは十分に伝えているとは言いがたい。以下の部分でキナッツォに基づいて、フランチェスコ一世が取った行動を具体的に見ていくことにする。

まず、ヴェネツィア、ジェノヴァ両軍の決戦が始まる以前に、フランチェスコ一世はプレント川経由で数々の物資をジェノヴァ側に供給している。その際、彼自らがキオッジャに入ったわけであるが、それは彼が事前にジェノヴァに対し、年額1万9500フィオリニの貸付と、キオッジャにいる

## もう一つのキオッジャ戦争（1378-1381）

ジェノヴァガレー船団に対し、必要なだけのパン、ワイン、肉を与えることを申し出ていたためであった<sup>21)</sup>。彼がパドヴァを出発してキオッジャに向かう場面を、キナッツォは以下のように記している。

8月7日、パドヴァ領主フランチェスコ一世は本人自らカステルカーロを経由し、ブレンタ川を通過して、ヴェネツィア方のモンテアルバーノの塔の近くまでやってきた。この塔はブレンタ川沿いにあった。パドヴァ領主は自分のすべての兵と工兵そしてよく装備された50隻の川船を率いていた。彼は、ジェノヴァ軍が（キオッジャに）到着したのを知っていたが、モンテアルバーノの塔があるので、その川を通過してジェノヴァのガレー船と合流することが出来なかった。その塔がブレンタ川沿いにあったためであった。そのことをフランチェスコ一世は知っていた上に、彼は戦いを起こして自分の兵を失いたくなかったので、直ちに工兵に命じて、投げ槍も石の弾丸も彼らを傷つけることの出来ないほどにモンテアルバーノから離れたところに溝を掘らせた。この溝を使って湿地を横切り、ナサルオーロの塔まで通じる水路に行き着くためであった。

（中略）

この長い溝は半マイル以上あったが、半日で完成した<sup>22)</sup>。この船団がナサルオーロの水路まで着くと、パドヴァの船の大部分がヴェネツィアのものであるナサルオーロの塔を落とすために殺到した。この塔は臆病にも、戦わずしてすぐに降伏した。守備兵は18人で、全員がキオッジャ人であった。あるものはキオッジャに立ち去り、あるものは捕虜になった<sup>23)</sup>。

キオッジャにはジョヴァンニ・ジブラン率いるヴェネツィアの艦隊がパ

ドヴァ軍の前進を阻止するために配置されていたが、彼等は自分の持ち場を離れてキオッジャに帰ってしまい、プロヴェデイトーレ（軍監のこと。ヴェネツィア貴族から選ばれたもので、傭兵隊長の支援及び監視の役割を受け持つ）の命令も聞かずにキオッジャにとどまった。そのためパドヴァの船団は、勞せずしてジェノヴァ人と合流することが出来た。その後ここにいたヴェネツィア人指揮官はヴェネツィア市に連れて行かれて裁判にかけられ、6ヶ月の禁固刑、10年間の議員になる資格の停止、そして司令官になる資格を永久に剥奪されている<sup>24)</sup>。

キオッジャの戦闘において、主兵力はジェノヴァ軍であったわけだが、パドヴァやハンガリーも兵力を率いて加わっていた。パドヴァ軍の兵の指揮官はドイツ人傭兵隊長ゲラルド・デ・マソール、それとパドヴァ領主の義理の兄弟に当たるヤコポ・デ・ボルチャの2人であった。攻撃軍の総兵力は約2万4千人、守備側のヴェネツィア軍は約4500人だった。攻撃は8月13日に開始され、16日にキオッジャが陥落した。この知らせは翌日にはヴェネツィアに知らされ、ヴェネツィアはすぐに使いを送って講和を求めたが、同盟軍はそれを拒否した。さらにフランチェスコ一世は、ヴェネツィアを海上から攻撃しようジェノヴァに仕向けたが、ジェノヴァのこの攻撃は成功しなかった。また、ジェノヴァはフランチェスコ一世に対してキオッジャの売却を持ちかけた。最初の売値は5万ドゥカートであったが、ジェノヴァは後に20万ドゥカートに引き上げたので、この話は合意に至らなかった。さらにフランチェスコ一世はこの後、8月24日、代理人と一部の兵を残してキオッジャを立ち去り、パドヴァに引き上げてしまった<sup>25)</sup>。

ヴェネツィアの間近にあるキオッジャの陥落とジェノヴァ海軍の攻撃はヴェネツィア市内を大いに混乱させた。キナッツォが以下のように述べているほどである。

### もう一つのキオッジャ戦争（1378-1381）

ヴェネツィアは大きく破壊されたので、みんなが言うには、もしジェノヴァ軍がキオッジャをすぐにパドヴァの手に委ねて、ガレー船団を率いて直ちにヴェネツィアに来ていたならば、ヴェネツィアはすこぶる危険な状態に陥り、国が変わっていたかもしれない。しかし神は、そのような不祥事が起こって世界で最も偉大で有用な都市が壊れるのを望んではおられなかった<sup>26)</sup>。

とはいえ、

ジェノヴァはロンバルディア方面への出入り口となるすべての通路と砦を自分の手中に収めた。それはロンバルディア経由であろうと海路経由であろうといかなる品物もヴェネツィアに入ってこないようにするためであった。そしてジェノヴァは引き続き、ガレー船を外に出して見張らせた<sup>27)</sup>。

こうなると、ヴェネツィアに物資が入ってくる道はもうひとつしかなかった。北方のトレヴィーゾ方面からである。しかしキナッツォが以下のよう書いているとおり、護衛なしでは危険な状態であった。

12月22日まで、ジェノヴァのガレー船が（ヴェネツィア近辺）見張っていたので、いかなる物資も、海路によってもロンバルディアを通しても入ってこなかった。ついにはヴェネツィア側が軍船を率いて（ドージェ自らが司令官となって）出動した。もはや何もヴェネツィアには入らなかったため、小麦、ワイン、その他の必需品、木材、様々な商品を積んでくるためであった。シーレ川経由でトレヴィーゾから、飼料や塩漬の肉などが、ヴェネツィアの船の護

衛つきで入ってきたが、これは例外的なことであった<sup>28)</sup>。

一方、キオッジャはジェノヴァに任せたまのパドヴァであったが、ブレクタ川の南のカヴァルツェレ（キオッジャから約15キロほど内陸に入ったところに位置する小都市）には重大な関心を寄せていた。

フランチェスコ一世は、カヴァルツェレの砦が大きくて良好であり、自分の国境に近いことを知っていたので、それを自分のものにしようとして決心していた<sup>29)</sup>。

続いて④の場面、つまりヴェネツィア艦隊がジェノヴァ軍の立てこもるキオッジャを逆に封鎖した時期に関しては、キオッジャ攻略後、両者の間に意見の不一致はあったものの、パドヴァはあくまで同盟国としてジェノヴァを助け続けた。パドヴァを流れるブレクタ川はキオッジャの近くに河口を持っていたので、パドヴァはその川を使ってジェノヴァに食料などを補給していた。しかし段々それも困難となり、翌1380年4月を最後にこの試みは行われなくなった<sup>30)</sup>。

⑤の場面、すなわちキオッジャ奪回の後についてであるが、キオッジャ戦争に関する記述は、この場面、すなわちヴェネツィアがキオッジャを取り返したところで終わることが多い。しかし実際には戦いは続いていた。キオッジャ以外のところにジェノヴァ艦隊はまだ残っていたし、パドヴァ・ハンガリー連合軍はイタリア本土側、とりわけトレヴィーゾ近辺で戦い続けていた。このトレヴィーゾという都市はヴェネツィアの北約30キロのところの位置する小都市で、先述の1336年のヴェローナとの戦争に勝利してヴェネツィアの領土としたものであった。このトレヴィーゾは、ヴェネツィアからオーストリアやハンガリー方面への交通路に当たる重要な土地

## もう一つのキオッジャ戦争（1378-1381）

であった。この地域がヴェネツィアの敵対勢力に抑えられると、ヴェネツィアから北方への交通が遮断されてヴェネツィア商人の活動が制限されるばかりでない。この地方からの産物が入ってくるのがおぼつかなくなる。さらに、パドヴァ地方と合わせてトレヴィーゾ地方までが抑えられると、ヴェネツィアはテッラフェルマ側から完全に封鎖されることになってしまう。こうした事態をヴェネツィアが恐れていたことは、13世紀後半にエッツェリーノ・ダ・ロマーノが台頭してきたときのヴェネツィアの反応によっても明らかである<sup>31)</sup>。したがって、ヴェネツィアは何とかトレヴィーゾを死守したかったし、パドヴァ領主フランチェスコ一世はこの地域を手中に収めたかった。

ここで、トレヴィーゾをめぐるキナッツォの記述を追っていくことにする。前述のとおり、1378年8月から12月までは、キオッジャをめぐるヴェネツィアとジェノヴァとの間の攻防がたけなわであったが、この時期のトレヴィーゾに関しては、まだそこまでは緊迫していなかった。ハンガリー王ラヨシ一世は自分の甥カルロ・デ・ラ・パーチェに一万の兵を与え、全権を与えてトレヴィーゾ方面に送り出した。この兵がトレヴィーゾに到着したのは1379年の8月であった<sup>32)</sup>。

この時点でのトレヴィーゾについて、キナッツォは以下のとおり記している。

（ハンガリー王の甥の）カルロがトレヴィーゾの入り口あたりに陣を敷いたのを聞いて、パドヴァ領主フランチェスコ一世は大軍を率いてトレヴィーゾに行つてカルロに会つた。ヴェネツィア政府は、カルロの目的がトレヴィーゾにあることを知っていたので、トレヴィーゾに行つてカルロの前で他の都市の使者と交渉するための3人の使者を決めた。その3人は、法学博士であるニコロ・モロシーニ、

ジャン・グラデニーゴ、ザッカーリア・コンタリーニであり、いずれも偉大で賢明な人物であった。

(中略)

交渉は一ヶ月以上、カルロ、ヴェネツィア人使者、他の都市の使者の間でほとんど毎日続けられた。

(中略)

ヴェネツィア政府は、かくのごとく卑屈に敵に屈従しなくなかったため、命令を発して交渉を打ち切らせ、シーレ川経由でヴェネツィアに帰らせた<sup>33)</sup>。

交渉決裂後の戦況は攻撃側にとって、はかばかしくなかった。ハンガリー王の甥カルロは、トレヴィーゾ市がとて守りが堅く、攻撃しても損害が大きただけで戦果が上がらないのをみて、1379年10月に陣を引き払い、故郷に戻った<sup>34)</sup>。これ以降しばらくの間、キナッツォの筆は他の戦線に向けられている。彼が再びトレヴィーゾの戦いについて書くとき、翌1380年5月の戦況から始まっている。

このように、トレヴィーゾ市はパドヴァ領主フランチェスコ一世によって戦いを仕掛けられていたので、ヴェネツィアは、船を使ってシーレ川経由で軍需品を送るのをやめなかった。トレヴィーゾが困難に陥らないようにするためであった。そこでパドヴァ領主は、1380年5月に、この通路を断ち切ろうと決意した。

(中略)

彼は、シーレ川沿いのカサーレにとて強固な物見櫓を作らせ、そしてそこに川を横切る橋を架け、シーレ川のもう一方の岸にも物見櫓を作った。さらに川の中に多くの杭を何列にも打ち込んだ。船が



## もう一つのキオッジャ戦争（1378-1381）

この道をどうしても使うことが出来ないようにするためであった。ヴェネツィア政府はシーレ川がこのようにして封鎖されたのを知った。また、メストレを経由して陸路を使っても、シーレ川を使ってやったようにはトレヴィーゾを助けることが出来ないので、以下のような方法を使うことにした。まず船を使って飼葉をヴェネツィアからカサーレの近く、パドヴァ軍の大砲の2射程分の距離のあたりまで運び、そこから陸路を使ってトレヴィーゾまで運ぶというものだった<sup>35)</sup>。

しかし、このようなヴェネツィアの苦心も実を結ばなかった。フランチェスコ一世が以下のような手を打ったからである。（ちなみに、1380年6月24日に、キオッジャにこもっていたジェノヴァ軍が降伏したことを付け加えておく。普通のヴェネツィア史ではヴェネツィア軍のキオッジャ奪回以降のことはあまり大きく触れられないが、これ以降もヴェネツィアの困難が続くことは以下に見るとおりである。）

（1380年）8月10日、パドヴァ領主は自分の騎兵・歩兵全てをカサーレに送った。彼の命令は、近くの森の木を切って、砦を拡大し、そこに大軍が常駐出来るようにするというものであった。このようにして、パドヴァ軍は、ヴェネツィア側が軍需品を輸送出来ないようにした。この砦を拡大し終わると、パドヴァ軍は、そこに十分な兵と小麦を残して立ち去り、トレヴィーゾの近く、シーレ川沿いに陣を張りに行った<sup>36)</sup>。

これに対し、ヴェネツィア軍は、シーレ川に打ち込まれた杭を引き抜く装置をもってカサーレまで出向いたが（1380年8月末）、結局うまくいか

ず、同年9月末にはヴェネツィア軍は、シーレ川沿いの前線基地であるムゼストレを引き払ってヴェネツィアの対岸のメストレに退却せざるを得なかった（1380年9月27日）。この時点で、シーレ川を通してトレヴィーゾに物資を輸送することは出来なくなった<sup>37)</sup>。しかし、ヴェネツィアはなんとしてもトレヴィーゾへの補給を欠かさすわけにはいかなかった。次に引用するキナッツォの記述は、トレヴィーゾへの補給に必要とされる兵力の大きさとトレヴィーゾ市民の抱える不安を表している。

1380年10月8日、メストレにいるヴェネツィア軍指揮官は、500スタイオ（1スタイオは約83リットル）の小麦を全て馬に載せて、テライオ（メストレとトレヴィーゾの間にある小さな町）を經由してトレヴィーゾまで行かせた。その護衛として、150の槍騎兵、300の槍歩兵、400の弓兵が一緒に行った。

（中略）

この日の晩、彼等は無事に小麦をもってトレヴィーゾに到着した。そして同じ8日の晩、この部隊全員が馬を引き連れてメストレに戻った。この部隊とともに、市内の食糧不足を不安に思った多くのトレヴィーゾ市民が家族を連れてトレヴィーゾを出て行った。ヴェネツィアあるいは彼等が良いと思う場所に行くのが彼らの目的であった。

（中略）

ヴェネツィア人がトレヴィーゾを助けに行くたびに幾人かのトレヴィーゾ市民が家族を連れてメストレに行き、徐々にトレヴィーゾが見捨てられつつあるのを止めることは出来なかった<sup>38)</sup>。

補給の困難さとともに浮かび上がってきたのは、兵士に対する給与支払

## もう一つのキオッジャ戦争（1378-1381）

いの問題であった。ヴェネツィアから北西、パドヴァから北にカステルフランコという都市があるが、そこで起こったことをキナッツォは以下のように記している。

（1380年）12月21日、金曜日の朝、ヴェネツィアに以下のような知らせが届いた。去る木曜日（12月20日）の夕暮れ時に、カステルフランコの守備兵と現地住民の幾人かが、ヴェネツィア人のポデスタ（司法長官）をカステルフランコの城門から締め出した。このポデスタの名前はアンドレア・パラディーゾといった。（この反逆者達は『民衆万歳』と言いながら城の跳ね橋を上げ、城を奪った。兵士達が何ヶ月分もの給与を受け取っていなかったのにヴェネツィア政府が給与を支払いに来なかったのが原因であった。この時期のヴェネツィア市は、現在の戦争をまかなうべき戦費に関して、本当に困っていた。

（中略）

（兵士達は）クリスマスまで、カステルフランコを保ち、パドヴァ領主と何度も交渉していた。そして交渉が成立すると、パドヴァ軍のカステルフランコ入城を自由にした。クリスマスの日に、パドヴァ領主の息子自らが兵を伴ってこの都市に入った。

（中略）

カステルフランコはこんな風であった。そして兵士達は、パドヴァ領主から何千ドゥカートももらった<sup>39)</sup>。

また、パドヴァ軍だけでなく、その同盟国であるハンガリーも兵をこの地方に送ってきていたのも、ヴェネツィアには不利に働いていた<sup>40)</sup>。そこで、ヴェネツィアも決断を下さなければならなかった。キナッツォが次の

ように記している。

トレヴィーゾ市に関して、費用や負担がとてらかかっていること、カステルフランコ市が裏切り、トレヴィーゾ地方の他の城が飢えていること、その上兵士に対する支払いが悪く、今後も支払いのメドはたたないし、これらの大事な城の確保も望めないことをヴェネツィア人は知った。そこで、トレヴィーゾ市及びその地域の城から出て、それらをオーストリア公レオポルドに譲ることを交渉するために、使者をオーストリア公に派遣することにした。その目的はパドヴァ領主に損害を与えるためであった。(中略)

1381年2月17日、日曜から月曜にかけての夜半、ヴェネツィア貴族パンタロン・バルボがヴェネツィア市の代表の使者として、オーストリア公レオポルドのところへ出発した<sup>41)</sup>。

給与と支払いの問題は、ヴェネツィアの対岸のメストレでも起こっていた。

(1381年) 2月25日、カルネヴァーレの最初の月曜日の朝、ヴェネツィアの騎兵隊総勢118騎がメストレの陣地を飛び出した。彼等には不満を抱いて出発した。自分達は給料を受け取ることが出来ない、ヴェネツィア政府と取り決めたことが全く守られていない、自分達は兵役期間及びそれ以降もヴェネツィアに対して忠実に仕えた、というのが彼等の言い分であった。(彼らの一人の)騎士ファンティン・ゾルジは出発前に以下のことを言った。「もうこれ以上支払いを先延ばしにすることも待つことも出来ない。(所持金は)全て使ってしまった。我々はトレヴィーゾ地方にもう3日いて、給与の支払いを待つことにする。その期間内は、ヴェネツィアに敵対してト

## もう一つのキオッジャ戦争（1378-1381）

レヴィーン地方に損害を与えることはしない。しかし、もし3日の間に支払いがなされなければ、我々は自分達にとって良いと思われるようにふるまうだろう。」<sup>42)</sup>

トレヴィーンにおいても、給与問題は深刻であった。この問題を話し合うべく、トレヴィーンから使者がヴェネツィアに送られた。この使者は（1381年）3月8日にヴェネツィアに着いた。以下のキナッツォの記述は、財政的に行き詰ったヴェネツィアの苦しい状況をよく示している。

ヴェネツィアからトレヴィーンに送るべき兵はなく、トレヴィーンを助けるべき道は陸路水路ともふさがれているので、トレヴィーンにお金を送ることが出来ないのは明らかだった。そこで、ヴェネツィアからトレヴィーンに使者を送ること、その使者に手紙を持たせて（トレヴィーンにいる）ポデスタ（司法長官）と指揮官に渡すことが決められた。手紙の内容は、「もし、ヴェネツィア政府に総額一万六千グロツの銀貨を貸してくれる人物をトレヴィーンで見つけることが出来たならば、そしてそのお金を貸すことがそのトレヴィーン人の誰それにとって好ましいならば、ヴェネツィア政府はそのお返しに、（後に）その金額をヴェネツィアで払うであろう」というものであった<sup>43)</sup>。

その後、トリノ領主ヴィットーリオ・アメデーオの仲介で講和会議が設けられ、結局1381年8月24日にトリノの和約が成立した。この和約はヴェネツィアと反ヴェネツィア同盟各国（ハンガリー、ジェノヴァ、アクイレイア総大司教、パドヴァ）との間の個々の条約および5カ国間の共通条項からなっている。パドヴァとヴェネツィアとの間の主な条件は以下の

とおりであった。

- ① バドヴァ領主は戦時中に占領したトレヴィーゾの周辺領域部を保持出来る。
- ② バドヴァ領主はカヴァルツェレとモランツァーノの砦をヴェネツィアに返さなければならない。ただし、そこにあった軍需品は持っていてもよい。
- ③ ヴェネツィア共和国はバドヴァ領主に対し、カロンの塔（ラグーナの近くに位置する）を、そのままの状態で返さなければならない。ただし軍需品は持って行ってもよい。
- ④ 国境に関しては、1373年の和約において決められたままの状態に保つ。
- ⑤ ヴェネツィア政府は、戦前のごとく、バドヴァに対して塩を供給する。
- ⑥ 1373年の条約に反して立てられたバドヴァ領主の砦は、保存することも破却することもバドヴァ領主の意志に任せられる。
- ⑦ バドヴァ領主は自分の国境の手前に、砦、塔などを好きなように作る事が出来る。
- ⑧ ヴェネツィアとバドヴァとの間の（川の）航行を妨げている全ての水門や杭を撤去しなければならない。

（追加事項）その他の事に関しては、1373年の和約の条項に従う<sup>49)</sup>。

これを1373年の講和条約と比べると、以下のようなことが言える。まず、国境近辺での自分の領土側にバドヴァは砦を作ることが出来るようになった。この点に関してはバドヴァにとって前進であった。しかし国境線そのものに関しては1373年の条約に基づくとされており、バドヴァにとっては十分な成果が上がったとは言いがたい。トレヴィーゾの周辺領域部を領有することになったのはバドヴァには成果であったが、前述のとおり、肝心のトレヴィーゾ市はバドヴァの手に渡らずにオーストリア公の手に入った。結局この戦争では、バドヴァはいくつかの成果を上げたが、国境問題に関

## もう一つのキオッジャ戦争（1378-1381）

しては課題も残ったのである。このようにしてキオッジャ戦争は終わった。

### 第3章 キオッジャ戦争後のフランチェスコ一世—トレヴィーゾ攻略

1381年8月のトリノーの和約で、いわゆるキオッジャ戦争すなわちヴェネツィア対反ヴェネツィア同盟の戦争はひとまず終わり、ジェノヴァの脅威は去った。しかし、ヴェネツィアの困難はまだ続いた。一つには、深刻な財政難に陥ったこと、もう一つは、パドヴァ領主フランチェスコ一世の脅威は一向に減じなかったことであった。トリノーの和約の後、ヴェネツィアがテッラフェルマ問題に関しては積極介入を避けたのとは対照的に、パドヴァ領主フランチェスコ一世はトレヴィーゾ、フリウーリ地方、そしてヴェローナの領土化あるいは影響力の強化を積極的に推し進めていた。

1382年ハンガリー王ラヨシ一世が死去<sup>45)</sup>して、カッラーラ家の後ろ盾がなくなったにもかかわらず、フランチェスコ一世の積極政策は変わらなかった。トリノーの和約で取り損ねたトレヴィーゾ市の領有を彼はあきらめなかった。年代記作家キナッツォはキオッジャ戦争後のフランチェスコ一世についても記しているので、彼の年代記を引用しながらフランチェスコ一世の行動を追っていくことにする。

1382年8月6日、フランチェスコ一世の動きが危険だと感じたトレヴィーゾ市民は、パドヴァ領主と話し合うために二人の使者をパドヴァに派遣した。パドヴァ領主の返事は、オーストリア公がトレヴィーゾを所有しているのは道理に反している、ということであった。そして8月8日、パドヴァ領主は大軍を率いてトレヴィーゾに向かい、トレヴィーゾ市の近くに陣を敷いた。そしてトレヴィーゾ市に対して、3日間の猶予のうちに自分たちの好きな土地に行くよう通告した。多くの市民が、家族や動物、飼葉などを持ってトレヴィーゾから逃げ出した。それと同時に、パドヴァ軍の

攻撃を恐れたトレヴィーゾ市民は、オーストリア公に使者を派遣した。その使者は15日に公のもとに着き、26日にトレヴィーゾに戻ってきた。すぐに大軍を率いてトレヴィーゾに行くという返事が公表されたのは、翌8月27日のことであった。9月16日、28日と、オーストリア公の援軍が徐々にトレヴィーゾに到着した。9月28日、ハンガリー王ラヨシ一世の死去の知らせがトレヴィーゾに届いたとき、キナッツォが記すには、

大部分の人々が、パドヴァ領主が大きな力を失ったと信じた。(略)  
しかし、彼はその軍事行動を決してやめようとしなかった<sup>46)</sup>。

パドヴァ領主フランチェスコ一世は、時にはアクィレイア総大司教の援護を受けながら、軍事行動を展開した。一方、オーストリア公側も徐々に援軍をトレヴィーゾに送ってはいたが、12月初めにほとんど全てのドイツ兵がトレヴィーゾを出発して故郷に帰り始めた。当然ながらトレヴィーゾ市民は不信感を抱き、オーストリア公に使者を送った。この時期、オーストリア公は何度も手紙を書き送り、自国にやるべきことがたくさんあるからトレヴィーゾに来れないのだと釈明した。さらに翌1383年2月に入ると、トレヴィーゾに残っていた守備隊の大部分がトレヴィーゾから出て行き、市内に残る兵力はわずかなものになってしまった<sup>47)</sup>。もっとも、その後、散発的ではあるが援軍はトレヴィーゾに来ていたし、オーストリア公自身も動かなかったわけではなかった。1383年5月30日の時点で、オーストリア公はトレヴィーゾから北数十キロの小都市コネリャーノにいたが、ついにそこを出発し、トレヴィーゾに行った<sup>48)</sup>。

1383年7月2日、オーストリア公レオポルドはトレヴィーゾを出発してフランチェスコ一世に会いに行った。和平の交渉をするためであったが、この日は両者合意に至らなかった。翌7月3日、オーストリア公はフラン



## もう一つのキオッジャ戦争（1378-1381）

チェスコ一世に使いを送って交渉させたが、これももうまくいかなかった。そこでオーストリア公は、7月7日、フランチェスコ一世との合意に達することが出来ないのを知り、少数の兵をトレヴィーゾに残して出発し、自分の国に帰ってしまった。これに危機感を募らせたトレヴィーゾ市民は、食料やワイン、飼葉など必要なものを必死に買い集めた。キナッツォによると、この月に必要なものの一年分を集めたと言う。しかし、1383年8月、パドヴァ軍はトレヴィーゾの近くに陣を張り、砲撃を開始しただけでなく、近辺の地域で未だにトレヴィーゾ市に属しているところをさらに攻略していった<sup>49)</sup>。

1383年10月、オーストリア側の提案で、再び和平交渉が始まった。11月6日にはトレヴィーゾ市の代表も加わって交渉もたれることになった。11月下旬の時点ですでにパドヴァとトレヴィーゾとの戦闘行為はほぼ終わっていた。翌1384年1月20日、水曜日の朝、パドヴァ軍の兵を率いた使者がトレヴィーゾに到着した。その使者は、そこに残っていたオーストリア公の代表に対し、和平交渉が行われている場所に行くように命じた。オーストリア公側の使者がトレヴィーゾを出発したのは翌1月21日の朝のことであり、トレヴィーゾに再び戻ってきたのは28日、トレヴィーゾの大評議会が招集され、オーストリア公がパドヴァ領主にこの都市を譲ったのを確認したのは29日であった。2月4日にパドヴァ軍がトレヴィーゾに入城したところでキナッツォの手記は終わっている<sup>50)</sup>。

当然ながら気づかざるを得ないのは、トリノの和約以降のトレヴィーゾ争奪戦に関して、キナッツォがヴェネツィアについてあまり触れていないことである。トリノの和約にしたがって、ヴェネツィアはトレヴィーゾ市を手放した。しかし、パドヴァの敵方であるオーストリアに対してヴェネツィアが何らかの援助をしても不思議ではないのに、そのような動きをキナッツォが描いていない。このことは、キオッジャ戦争後のヴェネツ

イアの疲弊を示していると見る事が出来よう。ともあれ、こうしてパドヴァ領主フランチェスコ一世は、トレヴィーゾ地方を完全に掌握するに至った。このことは、フランチェスコ一世の勢力がこの地方を通過してフリウーリ地方に至ることが容易になったことを意味した。ヴェネツィアにとって深刻だったのは、トレヴィーゾ市がフランチェスコ一世の支配下に入ったことばかりではなく、トレヴィーゾがオーストリア支配下にあったときでさえ維持されていたヴェネツィアの古くからの特権を、フランチェスコ一世が認めようとしなかったことであった<sup>51)</sup>。

さて、ボスカルディンの統計を検討してみると、トリノーの和約以降でカッラーラ家の領内および国境付近の戦闘頻度が明らかに減少している。1381年7月から1385年4月までの46ヶ月における戦闘回数を見ると、パドヴァ市およびパドヴァ領南方面、西方面での領内及び国境付近では、ほとんど戦闘が記録されていない。また、ヴェネツィアとの国境近辺（ミラノ、カンボサンピエーロ）、オーストリアとの国境方面（バツサーノ、チッタデッラ）近辺でも、多くの戦闘が記録されているわけではない<sup>52)</sup>。しかし、このことは必ずしもパドヴァの積極政策が影を潜めたことを意味するわけではない。この統計の数字は、パドヴァ領内および国境近辺がおおむね平静であったことと同時に、この時期のヴェネツィアがフランチェスコ一世に対して受身な姿勢を取っていたことを示している。それから数年後の1388年、フランチェスコ一世はミラノ・ヴェネツィア同盟に敗れて地位を失うのであるが、ここでは割愛する。

### — む す び —

ヴェネツィア史に名高いキオッジャ戦争はジェノヴァとヴェネツィアの対決と見られがちである（そしてそれは誤りとは言えない）。しかし、キナッツォの年代記を読む限り、ジェノヴァとの戦いだけでなく、テッラフ

## もう一つのキオッジャ戦争（1378-1381）

エルマにおける陸での戦いがこの時期のヴェネツィアにとって少なからぬ負担であったことを認めなければならないだろう。そしてこの時期のヴェネツィアの主敵はパドヴァ領主フランチェスコ一世であった。1380年6月にキオッジャに籠城していたジェノヴァ軍が降参した後も、そして1381年8月のトリーノの和約以降も、彼は戦い続けた。1381年8月に結ばれたトリーノの和約から1388年のパドヴァ陥落まで、イタリア北東部の国際関係の主役はパドヴァ領主フランチェスコ一世であり、彼はヴェネツィアにとっての陸からの脅威であった。キオッジャ戦争で力を消耗したこと、海上にも目を向けざるを得なかったという事情はあるにせよ、ヴェネツィアは、フランチェスコ一世の攻勢の前に守勢に回らざるを得なかった。その後、1388年にパドヴァが陥落した時も、ミラノとの同盟なしではヴェネツィアは独力ではフランチェスコ一世を倒せなかったのである<sup>53)</sup>。1372年の国境紛争及びそれ以前と比べると、テッラフェルマをめぐる両者の間の力関係の大きな変化を認めなければならないだろう。1405年にヴェネツィアはパドヴァを攻略し、カッラーラ家体制を最終的に打倒するわけであるが、そのときのヴェネツィアの処置に、カッラーラ家に対する考えが伺える<sup>54)</sup>。

この論文では、1380年前後において、パドヴァ市とその領主フランチェスコ一世がヴェネツィア共和国にとっての陸からの脅威であったことを、同時代人ダニエレ・キナッツォの年代記から引用しながら示してきた。なぜパドヴァ市がこのような積極攻勢をかけられるほどの力があつたのかが興味深いが、残念ながらそれを明らかにすることが出来なかったので、ここではパドヴァの行動に関する事実を記すにとどめた。

## 注

- 1) 第一次対ジェノヴァ戦争（1257-1270）、第二次（1294-1298）、第三次（1350-1355）に続いて4回にわたって戦争が繰り返された。

- 2) 1380年5月、ヴェネツィアの要請を受けてミラノ軍はジェノヴァ領に侵攻した。Gian Maria Varanini, 'Venezia e l'entroterra (1300 circa-1420)', *Storia di Venezia dalle origini alla caduta della serenissima, III*, Roma, 1997, p. 203.
- 3) Frederic C. Lane, *Venice: A maritime republic*, Baltimore, 1973, p. 5.
- 4) 教父たちの父という名誉上の称号を持つ高位聖職者を総大司教という。アクリレイアは6世紀の半ばに司教区から大司教区へと昇格している。
- 5) Marco Pozza, 'Un trattato fra Venezia e Padova ed i proprietari veneziani in terraferma', *Studi veneziani, N. S. 7 (1983)*, pp. 15-29.
- 6) 1107年と1142年に、プレント川の権利をめぐるパドヴァとヴェネツィアとの間で争いが起こり、いずれの件もヴェネツィア人にとって有利な形で終結した。さらに1162年には、パドヴァがカヴァルツェレの城を攻撃したが、すぐにこの争いは収まった。さらに13世紀前半には、1214年、1220年、1225年、1234年と相次いで両者の間で争いが起こっている。Marco Pozza, *op.cit.* を参照。
- 7) たとえば、1256年にヴェネツィア共和国の大評議会で可決された法案によると、ある地方に土地を所有するヴェネツィア市民及びその親族は、その地方に関する討議に参加出来ず、土地を所有しているヴェネツィア人は、その地方へ使節として行くことが出来なかった。Vittorio Lazazarini, 'Antiche leggi venete intorno ai proprietary nella terraferma', *Nuovo archivio veneto 38 (1919)*, pp. 6-8.
- 8) この直前までヴェネツィアとパドヴァとの関係は、1291年に同盟が結ばれているように、必ずしも険悪というわけではなかった。しかし、この同盟の期限が1300年に切れ、更新がなされなかった。この紛争は大規模な軍事行動には至らず、小競り合いと外交交渉で終わった。このとき、パドヴァをヴェローナが支持し、トレヴィーゾがヴェネツィアに好意的であった。Paolo Sambin, 'Le relazioni tra Venezia, Padova e Verona all'inizio del sec. XIV', *Atti dell'Istituto Veneto di Scienze, Lettere, ed Arti, 111, 1952-1953*, pp. 205-211. このことは、この紛争が単に2勢力の争いでは終わらないことを示している。
- 9) フェツラーラの跡目争いに介入してこの都市を勢力下に置こうとしたヴェネツィアの軍事行動。この際にはローマ教皇をはじめとする近隣勢力がヴェネツィアに反発し、ヴェネツィアの目論みは頓挫した。

もう一つのキオッジャ戦争（1378-1381）

- 10) フィレンツェの場合、フィレンツェ近郊の都市ルッカを巡ってヴェローナのスカーラ家と対立していた。
- 11) Vittorio Lazzarini, 'Storia di un trattato tra Venezia, Firenze e i carraresi', *Nuovo archivio veneto*, 18 (1898), pp. 245-249.
- 12) その当時のカッラーラ家当主ジャコポとその息子フランチェスコは、1345年10月9日、ヴェネツィアの貴族になった。翌年のザーラ（現クロアツィアのザダル）の反乱の時には、パドヴァはヴェネツィア側にたち、援軍を送った。1348年、ヤコポはカポディストリアの包囲戦に参加した。1350年、ヤコポはヴェネツィアを助けてジェノヴァに対抗した。Cesare Foligno, *The story of Padua*, Neendern/Liechtenstein, 1970, p. 118.
- 13) Daniele di Chinazzo, *Cronica de la guerra da Viniciani a Zenovesi*, Vittorio Lazzarini, (ed) Padova, 1958, p. 25.
- 14) Paolo Sambin, 'La guerra del 1372-73 tra Venezia e Padova', *Archivio veneto quinta seria* 38-39, (1946-1947), pp. 71-73. さらに、パドヴァはクランの塔をヴェネツィアに譲ること、ヴェネツィアはパドヴァに対し、塩の供給を保証すること、パドヴァ側は、今後15年間にわたり、ヴェネツィアのサンマルコ寺院に年間300ドゥカート寄付することも定められた。
- 15) この和平交渉において、ヴェネツィアは以下のような条件を出してきた。
  - 「パドヴァはヴェネツィアに対し、30万ドゥカートを支払う」
  - 「国境線に関しては、ヴェネツィアはクランの塔を保持出来る。そしてパドヴァはその塔から7マイル以内の地域では砦を作ってはいけない」
  - 「カステルカーロの砦をパドヴァは壊さなければならない。また、ブレンタ川ぞいに関しては、ボヴォレンタまでいかなる砦も作ってはいけない」
  - 「山間部の国境線に関しては、ヴェネツィアはカッサマッタを保持し、ソラーニャをパドヴァに返す」
  - 「パドヴァは過去におこなったすべての外国との同盟を破棄しなければならない。将来条約を結ぶときはヴェネツィアの同意を得なければならない」*Ibid.*, pp. 41-45.
- 16) Daniele di Chinazzo, *op.cit.*, pp. 11.
- 17) 米山喜晟, 鳥居正雄共著, 『イタリア・ノヴェッラの森』, 大阪, 1993年, pp. 707-708.

- 18) たとえば、キナッツォはパドヴァ領主フランチェスコ一世のことを「戦に関して偉大なる賢明さと繊細な心をもった人物」と持ち上げている。Daniele di. Chinazzo, *op.cit.*, pp. 10-13.
- 19) Jean-Claude Hocquet, 'La politica del sale', *Storia di Venezia dalle origini alla caduta della serenissima*, II, Roma, 1995, p. 713.
- 20) ハンガリーがキオツジャ戦争で反ヴェネツィア同盟に加わって戦争に参加した一因として、ヴェネツィアの塩の問題があった。Gian Maria Varanini, *op.cit.*, p. 201. さらにこの要因の他に、ハンガリーがヴェネツィアに開戦した原因が、ダルマツィア沿岸地域をめぐる両者の対立はもちろんのこと、ナポリ女王ジョヴァンナがヴェネツィアと友好関係にあるというのものもあるらしい。ハンガリー王ラヨシュ一世の弟アンドラージュはジョヴァンナと結婚して、彼女とともにナポリを統治していたが、彼は妻たるジョヴァンナに謀殺されてしまった。バムレーニ・エルヴァイン編、田代文雄・鹿島正裕共訳、『ハンガリー史 1』恒文社、1980年、pp. 107-108. なお、ダルマツィア沿岸を支配していたハンガリー王はジェノヴァ人に便宜を図り、彼等にダルマツィア沿岸の港を使わせていた。
- 21) Vittorio Lazzarini, 'La presa di Chioggia (16 agosto 1379)', in *Archivio Veneto, quinta seria*, 48-49, 1951, p. 55.
- 22) 船を通すための長さ半マイルの溝を半日で掘るとするのが可能なのかどうか疑わしいが、原文に沿って訳した。
- 23) Daniele di Chinazzo, *op.cit.*, p. 47.
- 24) Vittorio Lazzarini, 'La presa di Chioggia (16 agosto 1379)', *op.cit.*, pp. 56-57.
- 25) *Ibid.*, p. 66.
- 26) *Ibid.*, p. 56. キナッツォの親ヴェネツィア感情を示していると考ええる。
- 27) *Ibid.*, pp. 54-55.
- 28) *Ibid.*, p. 55.
- 29) *Ibid.*, p. 55.
- 30) Luigi Antonio Casati, *La guerra di Chioggia e la pace di Torino*, Firenze, 1866, pp. 132-134.
- 31) この時期、帝国皇帝フェデリーコ二世はもはやなく（1250年死去）、その子のコンラート四世も死去していて、ヴェネツィア近辺における帝国の勢力

もう一つのキオッジャ戦争（1378-1381）

は雲散霧消していた。しかしその代わりに台頭してきたのがエッツェリーノ・ダ・ロマーノ（帝国派）であった。すでにヴェローナ、パドヴァ、ヴィチエンツァを押さえていた彼は、その勢力をフェルトレ、ベッルーノ、エステ、モンセーリチェにまで伸ばそうとしていた。このことは、ヴェネツィアを背後から遠巻きに包囲することを意味していた。エッツェリーノのこの行動に不快感を持ったアクイレリア大司教グレゴリオ・ディ・モンテロンゴ（教皇派）が反エッツェリーノの同盟を推進し、当然ヴェネツィアもそれに加わった。ヴェネツィアは教皇派でも皇帝派でもなかったが、エッツェリーノの勢力を壊したかった。Ernesto Sestan, 'La politica veneziana del duecento', *Archivio storico italiano*, 85, 1977, pp. 321-322.

- 32) Daniele di Chinazzo, *op.cit.* p. 65.
- 33) *Ibid.*, pp. 65-67.
- 34) *Ibid.*, p. 68.
- 35) *Ibid.*, p. 145.
- 36) *Ibid.*, p. 146.
- 37) *Ibid.*, pp. 149-152.
- 38) *Ibid.*, p. 153.
- 39) *Ibid.*, p. 163.
- 40) *Ibid.*, p. 164.
- 41) *Ibid.*, p. 164.
- 42) *Ibid.*, pp. 164-165.
- 43) *Ibid.*, pp. 168-169.
- 44) Luigi Antonio Casati, *op.cit.*, pp. 254-256.
- 45) ラヨシュー一世には男子がいなかったので、1382年の彼の死後は娘マリーアが女王として即位したが、その後は内部の政争が激しくなった。パムレーニ・エルヴァイン *op.cit.*, pp. 109-112.
- 46) Daniele di Chinazzo, *op.cit.* p. 232.
- 47) *Ibid.*, pp. 237-238.
- 48) *Ibid.*, pp. 242-243.
- 49) *Ibid.*, pp. 247-249.
- 50) *Ibid.*, pp. 251-255. なお、トレヴィーズを取得する代わりにフランチェスコ

一世はオーストリア公に10万ドゥカート払ったのだが、そのことにキナッツォは触れていない。

- 51) Roberto Cessi, 'Venezia e la preparazione della Guerra friulana (1381-1385)', *Memorie storiche forogliesi, X (1914)*, pp. 414-473.
- 52) Antonio Boscardin, 'Guerre campali e assedi nel padovano durante la signoria carrarese', *Studi storico-militari.*, pp. 238-243.
- 53) 1388年の同盟により、ヴェネツィアは2500の歩兵と300の弓騎兵、そして100の重装騎兵を準備したが、この戦力はヤコボ・ダル・ヴェルメ指揮下のミラノ軍には及ばなかった。E. Mallett, J. R. Hale, *The military organization of a renaissance state-Venice c. 1400 to 1617*, Cambridge, 1984, p. 16.
- 54) 1405年にヴェネツィアが共和国がバドヴァとヴェローナを攻略した際、ヴェローナの支配者であったスカーラ家の者はダルマツィアやギリシャで豊かな年金生活を送ることが出来た。それに対し、カッラーラ家の支配者であったフランチェスコ2世はヴェネツィアに連行され、そこで獄死した。Frederic C. Lane, *op.cit.*, p. 227.



## **Another War of Chioggia (1378-1381)**

—Venice and the Lord of Padua, Francesco I—

Atsushi OMOJI

Generally, the fourth war between Venice and Genoa (the “War of Chioggia”) is famous because this war had a decisive impact on Mediterranean trade. But, behind the war, there was another important war between Venice and Padua on the Italian mainland. This war is less famous, and many historians have paid little attention to it.

Until the second half of the fourteenth century, Padua had not threatened Venice, but Francesco I, lord of Padua from 1355 to 1388, changed this situation: he entered into an alliance with Hungary against Venice.

During the War of Chioggia (1378-1381), on sea the army of Genoa was the main body of the anti-Venice army, but on the mainland the lord of Padua had the initiative, helping the Genovese army, while also attacking and occupying many cities subordinate to Venice.

While Venice fought against Genoa in Chioggia, its point of access to the sea, on the mainland it also fought against Francesco I to secure its commercial route to Germany and Lombardia. The important city for both Venice and Padua was Treviso, because without this city Venice could not maintain its surface trade routes with other Italian cities, and with the European states.

In June of 1380, the Venetian army defeated the Genovese army at Chioggia, but on the mainland Padua remained dangerous, attacking not only Treviso but also other small cities allied to Venice. Because of its financial and military difficulties, Venice could not assist its subordinate cities very much. The city of Treviso was well-defended, and the army of Padua did not succeed in occupying it. But the Venetian government judged that it would be difficult

to defend Treviso, because the alliance of Padua and Hungary made then much stronger than Venice, and because they disrupted the transport of food and necessities between Venice and its subordinate cities. Also, Venice could not pay its the soldiers satisfactorily. Finally, Venice decided to cede the city to the Duke of Austria. In the Peace of Turin (1381), Padua got some territory near Treviso, but not Treviso itself, so, the Lord of Padua, declared war against Austria, too. Three years later, in 1384, he bought Treviso for 100.000 ducats from the Duke of Austria, who had given up the attempt to hold the city. In this way, Francesco I continued to be a danger to Venice until 1388 when Padua city fell to the allied army of Milan and Venice. This episode forced Venice to reflect deeply on its of the control of the Italian mainland.

In this sense, the “War of Chioggia” was a very significant event.